

## 6月14日 年間第11主日 マタイ9章36～10章8節 わたしたちも弟子から使徒へ

今日は久しぶりに年間の主日です。前回も書いたように、聖霊降臨の週から年間が始まっています。「年間」というととくに記念することがない「普通の日」のようなイメージがありますが、イエスと教会の宣教を記念する大切な期間です。今日は弟子たちの選定と派遣についての内容ですが、わたしたちへのみことばとして読むこともできます。

十二人の弟子はすでに選ばれていたとも考えられますが、ここで改めて名前が挙げられます。十二という数字はイスラエルの十二部族を表すので、あとで出てくるとおり、イスラエルの民への宣教を意味します。ずいぶん前のことですが、京都の聴覚障害者の山本さんに「弟子は手話でどう表しますか」と尋ねたところ、膝の上に両手先をちょんちょんと触れられました。なぜ？と調べてよく聞いたら、丁稚（でっち）の前掛けをあらわしているということでした。弟子と丁稚、呼び名も役割も似ていますね。丁稚は未成年でしたが弟子は大人です。でもイエスの弟子もイエスに従いながら宣教を学んでいたということは共通していますね。

その弟子たちをイエスは宣教に遣わされます。いよいよひとり立ち、いや二人ずつ組にして、と他の福音にあるのでふたり立ちでしょうか。異邦人やサマリア人のところではなく、「イスラエルの失われた羊」のところに行きなさいとイエスは言われました。これは今日の福音の最初にある「飼い主のいない羊」のような、打ちひしがれている人々のところに行きなさい、という意味でしょう。イエスご自身もイスラエルのそのような人々から宣教を始められました。そして十二人という数もそれを表しています。

いずれにしても、彼らは派遣されることを通して弟子から使徒となったのです。しかし、彼らはイエスの教えを十分マスターしたのでしょうか？派遣のあとイエスが受難を予告された際の彼らの反応や、ヤコブとヨハネの母の願いの箇所を読むと、イエスのことがちゃんとわかっていないように思います。「弟子たち、ほんまに大丈夫か？」と言いたくなりますが、イエスは「天の国は近づいた」と宣べ伝えなさいとだけ言われます。これはイエスに代わって福音を教えるというよりも、「イエスによって天の国（神の国）がもうすぐ来るよ」と告げなさいということでしょう。それなら大丈夫ですね。もちろん自分なりに理解したイエスの教えも伝えたとは思いますが。

イエスは冒頭で「収穫のために働く人を送ってくださるようお願いなさい」と言われますが、この言葉は司祭召命を願う祈りで使われてきました。しかし、働き手は司祭や修道者だけではありません。わたしたちみんな、聖霊をいただいて社会に派遣されています。弟子たちは厳しい試験を受けてイエスに選ばれたものではありません。いろいろな立場の人が招かれています。共通点はただ一つ、イエスの呼びかけに従ったことです。わたしたちも同じイエスの弟子として招かれ、使徒として派遣されているのです。（柳本神父）